

永田友市先生をお送りする

岩 下 紀 之

永田先生が、今年度をもって辞職する考えであるとのこと意志を表明されたのは、昨年の五月ごろであった。たまたま私が学科主任であるため、かなりはやい時期におうかがいすることとなったのだが、定年より一年はやいことなので意外に思い、なにかご健康上の問題でもあるのかとおききしたところ、健康その他いっさい問題はない。ただ自分の意志でのことである、とのおおせであった。進退について発言なさる以上は、ご自分で熟慮のうえでのことであるから、無理にお引き留めするのは先輩に対して礼を失することになる。やむを得ず後任の人事などの処理に向かうこととした。ご心中を付度するに、後進に道を譲り、大学のためによかれとのお考えで、一種の美意識を实践なさったのではあるまいか。

先生は、東京高等師範学校に学ばれ、ご卒業後は旧制の高等女学校、中学校に奉職され、それ以後ながく高等学校の教鞭を執られた。旧制中学は、全国的な教員の配置を行っており、先生も、愛知県に限らぬ経歴をお持ちでいらつしやる。なお、先生の学ばれた東京高等師範学校は、当時は官立（今の国立）の教員養成の最高機関の一つであり、旧制高校に劣らぬ秀才があつまったところ、就中、その文科二部は最難関で何十倍という倍率の入試を突破しなくては入学できぬ受験生のがれの学科であつた。これによって先生がいかに優秀な学生であられたかがわかるのである。

昭和五十九年に愛知県立国府高等学校校長として定年をむかえられたとき、愛知淑徳大学におむかえすることができた。

激務のかたわら、研究活動も旺盛におつづけであったので、たくさんのお著書があり、ただちに教授として赴任していただき、ちょうど本学大学院の開設にもあたっており、先生にはその開学のメンバーとして活躍いただいた。俳文学会の会員であり、とくに表現学会においては理事をおつとめで、近世から、近代文学に至る幅広い分野の専門家であるのもっとも広範囲な受け持ちで卒業論文の指導にあたられた。就職関係の職務にも重責を果たされたが、なによりも、熱意あふれる授業ぶりであつた。指導助言をおしまれなかつた。長年高校の現場にあられたこともあつて、入学試験にあつては、ご自身問題作成にあたられるほか、指導助言をおしまれなかつた。近年のようにさまざまなかたちの入試が増えている時期に先生をお送りするのは、影響することまことに大きく、後進のわれわれは一層努力しなければならぬ。

とはいふものの、とどめえぬは時の流れである。先生には今後自由なお立場で、ご研究に励まれ、我々にも変わらぬご指導を賜わらんことをお願い申し上げる次第である。